

中国語における「状態」についての試論
—「状態」をどう規定するか—

A Semantic Analysis of 'State' in Chinese Grammatical Idea

大島 吉郎

OSHIMA Yoshiro

Abstract : 中国語における「状態」表示の標識は動態助詞(アスペクト辞)“着 zhe”を用いる。進行を表す副詞“在”と対比してその文法機能は説明されるが、そもそも「状態」とはどのような文法的意味を指すのか、明確な定義付けを検討すべきではないかと考え、初歩的な考察を行う。「状態」は広義の状態、狭義の状態、動詞を中心とする状態、形容詞を中心とする状態に分類、整理するのが相応しいと考える。「状態」は「変化」と対義であり、「状態」が示すゲシュタルトの崩れが「変化」であることを主張する。

Keywords : 状態 意味論的分析 時間 変化 ゲシュタルト

目次

- 0. はじめに
- 1. 狭義の「状態」について
 - 1. 1 動的と静的
 - 1. 2 運動と固定
- 2. 移動と変化
- 3. 形容詞における状態と属性
 - 3. 1 状態と属性
 - 3. 2 客観性と個別性
- 4. 状態と常態、様態
- 5. おわりに

引用文献

参考文献

0. はじめに

中国語¹は形態変化に乏しく、日本語に見られるような活用という文法手段も持たない言語の特徴から、語の意味及びその品詞は文中における位置によって決定される。この点から、中国においては語順の持つ重要性が極めて高いことがうかがえる。

中国語における文、あるいはフレーズに見られる語順の原則について見てみると、幾つかの観点から次のように整理することが従来より指摘されている²。

(1) 時系列 (動作・行為・事柄の発生順; 認識³の順) ⁴

(01) 洗完脖子和脸, 又很想脱得一丝不挂跳进河里去, 但看到与石桥连接的褐色田间路上, 远远地有人在走动, 也就罢了这念头, 站起来, 用未婚妻赠送的系列手绢中的一条揩着脸和颈。(顔を洗い終わると、素っ裸になって 川に飛び込みたくなったが、石橋に続く茶色い田舎路を遠くから歩いて来る人影が見えたので、やめにして立ち上がり、フィアンセがくれたハンカチセットの一枚をとりだし、顔や首を拭いた。) (莫言《白狗秋千架》、藤井省三訳)

(2) 旧情報 (既知) から新情報 (未知) へ (情報の価値が低い既知のものから未知の情報へ)

(02) 时间已过午, 太阳略偏西, 一阵阵东南风吹过来。(もう昼を過ぎており、太陽はやや西に傾き、東南の風が吹いていた。) (莫言《白狗秋千架》、藤井省三訳)

(3) 大 (きな単位) から小 (さな単位) へ

(03) 中华人民共和国/北京市/西城区/西三环路/魏公村/魏公桥/北京外国语大学/西院/专家楼/102室

(4) 際立ち⁵の大きいものから小さいものへ (目立つものから目立たないものへ)

(04) 天安门/南边/的/人民英雄纪念碑 (天安門南側の人民英雄記念碑)

(05) 人民大会堂/对面/的/中国历史博物馆 (人民大会堂正面の中国歴史博物館)

6

¹ 標準的現代中国語を指し、“普通話”もしくは“漢語”と呼ばれる。長江以北、華北平原を中心に話される北方方言を基礎方言とする。

² 当該言語集団に共有されている認知的言語様式であるということが出来る。

³ 「認識」は「認知行為」という意味であり、「知覚、記憶、発生器官、一般知識など、文法以外の諸要因と文法知識がそれぞれ独立して機能しつつ、かつ相互に絡み合っていると込まれている」と説明される (中島平三・外池慈生 1994 : pp.196)。

⁴ 時系列としての「時」は「時制 Tense : 過去・現在・未来」ではなく出来事 (event) の前後関係を意味し、時間軸に沿った動作のプロセスを指す。典型的な文型は連動文である。そのため文脈によっては事態、物事の発生順が原因・結果の関係としてとらえることが可能な場合がある。予期した結果と相反する事態が出現した場合には、逆説関係としてとらえられる。

⁵ 一般的な認知の観点から考えると、①明るいもの、②大きいもの、③輪郭がはっきりしているものを挙げることが出来る。

⁶ “人民英雄纪念碑北边的天安门”、“中国历史博物馆对面的人民大会堂”という語順も成立するはずだが、込み入った状況説明の場面が想像され、容認度、自然さには異論が生じるのではなかろうか。

例(01)は一文の中に①“洗完”、②“很想”、③“看到”、④“罢”、⑤“站起来”、⑥“揩”という六つの動詞(句)を時系列に配置し、動作主の行動、思考を描写する。

原則(2)、(3)、(4)についても中国語という言語における中国語話者の認識に基づいての説明であることに変わりはない。次の例(06)は前半開封、後半パッキングの作業手順に従えば時系列に沿った描写であるとともに、旧情報から新情報への展開を示す。原則(3)、(4)の適用は前半部分において可能であり、後半部分が成立するのは前半部分の存在を前提とする。パッキングの手順が原則(3)と抵触することになるが、既知である容器は話者、聞き手にとって際立ちが大きいものとして認識される。

(06) 房子里有箱子，箱子里有匣子，匣子里有盒子，盒子里有镯子。镯子外有盒子，盒子外有匣子，匣子外有箱子，箱子外有房子。(吴积才主编《普通话教材》1992年・语文出版社)(部屋の中にトランクがあり、トランクの中に手箱が入っていて、手箱の中には小箱があり、小箱の中には玉の腕輪が入っている。玉の腕輪は小箱に入っており、小箱は手箱に入っており、小箱はトランクに入っており、トランクは部屋の中にある：筆者訳)

語順の原則は単語内部の語構成に反映され、同時に語と語の意味的結びつきによる連語、一つのまとまった意味を形成する文においても共通して適用される⁷。

単語は話者が何らかの事物、出来事を認識した際に用いる最小の意味単位であり、各言語に固有の記号であると言える。⁸単語や連語、文を単位とする発話は、話者にとって事物、出来事(ヒト、モノ、コト)が存在として認識されたことを意味する。話者の目に映る現実の世界⁹は一つのトータルな情景、状態であり、動的状態(動態)と静的状態(静態)が混然一体となった、個々の事象がモザイクのように組み合わせられた総合的な、有るがままの様相と言ってよいであろう。

多様な事象の中からある一つの出来事を取り上げ(切り取り)、それを具体的な個別の動作として捉えると、動作が起こる空間、つまり動作の主体が存在することを前提とした地点を設定し¹⁰、参照点(ランドマーク LM)とする必要が生じる。動作は空間において展開

⁷ 中国語の文構造は二音節の単語に見られる意味関係が拡張したものであると考えられる。二音節から成る単語の構成原理は以下のタイプに分類出来る。①主述構造(“头痛、地震”)、②述主構造(“落雷、降水”)、③述目構造(“看病、上网”)、④修飾構造(“楼梯、语料库”)、⑤動補構造(“扩大、分开”)、⑥並列構造(“哭泣、寻找”)、⑦名詞+助数詞構造(“书本、事件、船只”)、⑧重疊構造(“翩翩、孜孜矻矻”)。①～⑧に対して(1)～(4)の原則が適用されていると考えてよい。中川正之 1996: pp.46-59 参照。

⁸ 例えば「林檎リンゴ」を中国語では“苹果 píngguǒ”、英語では apple と言うように、同じモノを指し意味しながら音声形式とそれに伴う文字表記異なることを言う。

⁹ 何かが存在するための空間を基盤として、何らかの事物が存在する現実の空間と認識の範囲。

¹⁰ 認知言語学では存在の基盤となる空間を「地」、存在する対象を「図」の関係としてとらえる。

するからである。動作の主体が空間を確定（占有し存在）することで動作（行動）の発生が担保され、現実の事象として認識されるのである。

空間を設定する際の第一段階は、動作が行われる地点を定めることである。現代中国語では介詞“在”を用いて示す。例えば、

(07) 有一匹全身皆白、只黑了两只前爪的白狗，垂头丧气地从故乡小河上那座颓败的石桥上走过来时，我正在桥头下的石阶上捧着清清的河水洗脸。（一匹の全身真っ白で前足だけが黒ずんだ白犬が、とぼとぼと故郷の小川にかかる崩れかかった石橋をわたってきたとき、私は橋のたもとの石段で冷たい川の水をすくっては顔を洗っていた。）
（莫言《白狗秋千架》、藤井省三訳）

(08) 他悄悄地在我后背上捅了一下。¹¹（彼は人に気付かれないようそっと私の背中を指でつついて気付かせてくれた：筆者訳）

例(07)は主体が存在する場所を、(08)は動作が行われる場所を示している。

動作の起こる地点を設定することで空間が生み出されると言うことも出来る。地点は話者の視点から「前／左／上・現地点（中心）・後／右／下」のように位置関係が示される。空間を立方体として見立てるなら、「上・下」は「高さ」として、「前・後」は「奥行（縦）」として、「左・右」は「横」として認識される。¹²

表1 地点について

空間（地点）		
前	中心	後
左		右
上		下

時間は空間の転写であると考えられるのは、時点「(話者の) 現在」を中心にして「過去／左／上・現在（中心）・未来／右／下」という軸の設定がなされ、それぞれメタファーとして「過去」、「未来」の表示に関わるからである。例えば、“前无古人，后无来者”（過去に例が無くこれからも後に続く人がいない：筆者訳）、“上午、下午”（午前、午後）のように“前后、上下”は対比的に時間を前後関係に見立てて用いられる。“左右”は時間を「流れ」に例え視覚化した場合、左（上流）を起点がある方に見立て、右（下流）を着点がある方に描くことから、過去と未来の対比を示すと考えられるのである。

¹¹ 用例は魯川主編 1994 年中国物资出版社《动词大词典》pp.989 “捅”の項参照。

¹² 中国語“上下、左右”には、数量表現の後に用いて概数を示す用法があるのも興味深い。

表2 時点について

時 間（時点）		
前	現在	後
過去		未来
左		右
上		下

地点は移動表示の手段として意味を拡張することで「起点・経路・着点」の視点を生じ、動作は段階表示の手段として意味を拡張することで「開始・進行・完了」の視点を生じ、発生は相対的に位置付けする手段として意味を拡張することで「発生、出現・存在・消失」の視点を生み出す。

「発生、出現」は無からの「発生、出現」と、すでに存在していても話者の認識の範囲に入らない段階から認識の範囲に組み込まれた結果の「発生、出現」とに分けて考えることが出来る。例えば、

(09) 发生了一个问题。(何か問題が生じた。)

(10) 来了一位客人。(どなたかお客さんが見えた。)

例(09)は何も問題の無かったところに何か問題が生じたことを言う。(10)はすでにどこかに居たが、話者には来ることが認識されていなかった人が来訪者として現れたことを言う。以上に述べたことを表3のようにまとめることが出来る。

表3 空間義と派生義

動作の発生：地点の確定（参照点）
地点の拡張：前／左／上・現地点（中心）・後／右／下 ¹³
時点の発生：現在
時間の拡張：過去／左／上・現在（中心）・未来／右／下
地点の拡張：起点・経路・着点（空間軸におけるプロセス）
動作の拡張：開始・進行・完了（時間軸におけるプロセス）
発生の拡張：発生、出現・存在・消失 ¹⁴ （空間軸・時間軸におけるプロセス）

¹³ 日本における「左上位の考え方」については「右と左のはなし」（吉海直人：2019https://www.dwc.doshisha.ac.jp/research/faculty_column/11732）参照。前後については過去と未来が交錯するため、ここに矛盾無く含めることは出来ない。際立ちという視点から考えると、「前後」は視野の点において「上下・左右」に対して優位であることが明らかであろう。空間としての前は主体の進行方向であり、従って未来、未然を含意し、後方は過去、即ち已然を相対的に指すことになる。時間軸から考えると指示の基点としての前後は、未然と已然を示すという相反した結果になる。

¹⁴ すべての「存在」は出現・存在・消失のプロセスをたどる。「出現」はあらかじめ存在しているものがその姿を現す場合と、無から生み出される場合とがある。「存在」は出現を前提とするものの、物に限定せず、事、事態についての「出現」の状況を考えてみると、そこには多様性が見られる。

他の要素も補い加え、空間と時間の関係を原形（プロトタイプ）と派生（隠喩：メタファー）の関係で整理してみることにする。

表4 空間と時間の関係について

	プロトタイプ	メタファー
	空間	時間
	現実	認識
基点	地点：話者の立脚点	時点：話者の現在
位置	前／左／上・現地点・後／右／下	過去／左／上・現在・未来／右／下
過程	起点・経路・着点	開始・進行・完了 ¹⁵
	前・後	過去（以前）・未来（以後） 未然（之前）・已然（之后）
	上・下	過去・未来
	到達	結果・目的の達成（実現）
	獲得	対象物の入手
	出現、発生・存在・消失	出現、発生・存在・消失
	動作	（状態） ¹⁶
	進行	持続
	移動	変化
	経路	経過
数値化	動作量	時間量
数値化	空間量（距離）	時間量

この表の中で位置付けに困難を伴うのが「状態」である。現実の空間における有り様でありながら、時間的要素も含んでいる点をどう解釈して整理すべきか、本稿では意味論的分析を加えてみることにしたい。

《現代漢語詞典》（商务印书馆 2016 第7版：pp.1725）“状态”の項には“人或事物表现

¹⁵ 中国語の文法体系では「アスペクト Aspect：中国語では“体”を助詞“了 le/着 zhe/过 guo”によって代表させるが、“着 zhe”は「状態」義の標識 marker であり、アスペクトの体系とすべきかには検討の余地がある。アスペクトが「開始・進行・完了」を意味の範囲とするのであれば、“着 zhe”は「未完了」として「進行」と「完了」の間に位置付けを行う性質のものである。「完了」は「着点（到達義）」のメタファーであると考え、①数値目標を伴う場合、②数値目標を伴わない場合、の二つのケースがある。①については、a)ゼロから増加、b)ゼロに向かって減却、の例が考えられる。②では、あるイベント（事件）を終えて、別のあるイベントへ移行することを示すと考えられる。

¹⁶ 「動作」のメタファーが「状態」であるという対応関係を設定するには論理的根拠を欠くものと言わざるを得ない。「動作」とは [+動的] であり、「状態」は [+静的] という対応関係にあるが、「状態」には [-時間] [-変化] 加わり、単純ではない。

出来的形态”（人や事物に現れ観察される形状や状態：筆者訳）のような説明が見える¹⁷。
 “形态”（同書：pp.1467）は“事物或形状的表现”（事物や形状に現れ観察されるあり様：
 筆者訳）のように説明される。

代表的な国語辞典、例えば『広辞苑』（岩波書店 2008 第六版：pp.1386）には「状態」
 を「物事のありさま。特に外面からそれと分かるありさま。ようす。」と記述するが¹⁸、「物
 事のありさま」には動的（運動・移動）¹⁹、静的（固定）の別があり、両者の区別を明確に
 行っていないこと、及び「状態」が何を根拠に捉えるかの相対的概念の提示が欠けている
 ことにより、読み手からは語義の捉え方に曖昧さが残ることは否めない。同書の記述は漢
 語表現の「状態」を和語「ありさま」、「ようす」に言い替えパラフレーズする方法で説明、
 あるいは解釈していると考えられ、論理的な説明にはなっていない嫌いがある。『大辞林』
 （第一版 1988：pp.1185 三省堂）は「変化する物事のその時その時の様子」と説明する。
 「変化」、「その時その時」がキーワードとなっている点が『広辞苑』と異なり、時間の概
 念を説明に取り入れた点は注目に値する。

表5 「状態、有様、様子」の釈義について

書名	出版社 発行年	項目	記述	頁
広辞苑 第六版	岩波書店 2008	状態	物事のありさま。外面からそれと分かる ようす。	pp.1386
広辞苑 第七版	岩波書店 2018	状態 有様 様子	物事のありさま。ようす。 ①物事のようす。状態。 ①ありさま。状況。	pp.1444 pp.103 pp.3015
国語大辞典 第一版	小学館 1982	状態	移り変わってゆく、人や物事のある時期 におけるありさま。	pp.1278
大辞泉 第二版上巻	小学館 2012	状態	人や物事の、ある時点でのありさま。	pp.1796
大辞林 第四版	三省堂 2019	状態 有様 様子	変化する物事の、その時その時の様子。 ①物事などの状態。ようす。 ①その場のありさま。状態、情勢。	pp.1341 pp.93 pp.2812

¹⁷ 語そのものは明代の文献に見られるが、現代語の“状態”の意味で用いられるようになったのは比較的
 新しい（《漢語大詞典》第5巻 1990：pp.13 参照）。刘正埙・高名凱・麦永乾・史有为 1984 は“状态”につい
 て触れてはいない。

¹⁸ 同書第七版 pp.1444 は「物事のありさま。ようす。」とし、「特に外面からそれと分かる」を削除す
 る変更を行っている。

¹⁹ 「動的」、「静的」は「動態」、「静態」と同義であるが、「動態」は「動的状態」、「静態」は「静的状
 態」を意味し、「状態」を説明しようとするのに意味素として「状態」という語を用いるのは循環論に
 陥ることになるため、その使用は避けることが望ましい。

「状態」の意味を規定するには<動的（運動・移動）>、<静的（固定：非運動・非移動）>を意味素として設定し、対義語、もしくは相対的概念を表す語の提起を行う、つまり概念を相対化してイメージを描くことが望ましいと考えられる。本稿では、定義付けが難しいことから、漠然と曖昧な概念のまま取り扱われることの多い「状態」の意味について、意味論の観点から分析を試みるものである。

1. 狭義の「状態」について

話者が自身の視点に立って、「外面からそれと分かるようす」を認識し言語化するとき、その視点は巨視的・総合的か、それとも微視的・分析的であるかによって、自ずと描かれる内容に差異が生じる。本稿では巨視的・総合的視点によってヒト、モノ、コト²⁰を広く捉える状態を「広義の状態」、微視的・分析的視点によって範囲を限定してヒト、モノ、コトが認識される状態を「狭義の状態」と規定することにする。両者の境界線は同様に相対的に捉えるべきものであるため、「狭義の状態」の意味範疇を規定することにより明らかになる²¹。

1. 1 動的と静的

「狭義の状態」はどのように規定されるか、「広義の状態」と対比してみることにする（以下、便宜上「広義の状態」を<状態 1>、「狭義の状態」を<状態 2>と称することにする）。意味素の記号〔+〕は有標 marked であることを、〔-〕は無標 unmarked であることを示す。「動的」は「運動²²・移動²³」を表し、「静的」は「固定²⁴」を表すこととする。我々が観察し認知する世界は「動的」、「静的」により構成されていると考えられるからである。

<状態 1>：巨視的・総合的・複数の対象 〔+動的〕〔+静的〕

<状態 2>：微視的・分析的・個別の対象 〔-動的〕〔+静的〕

<状態 1>は視野に入る、あるいは認知の及ぶ範囲に存在する複数の個体、すべてのヒト、モノ、コトが動的に、またこれと並行して静的に存在することを示す。<状態 2>はある特定の範囲における個別のヒト、モノ、コトが空間に固定され静的に存在することで、「運動、移動」が観察されないことを示す。

論理的にはさらに、

<状態 3>：微視的・分析的・個別の対象 〔+動的〕〔-静的〕

²⁰ 観察者である話者を取り巻く環境をヒト、モノ、コトで総称することとする。

²¹ 「広義の状態」は認識論からのアプローチが相応しく、「存在論」と深く関わるのが予想される。

²² 「運動」は「物が時間の経過と共に位置を変えること」（『新明解国語辞典』第七版 pp.141）の意味で用いる。

²³ 「移動」は「居住（活動）する場所を（一時的に）他に移動したり存在する位置を変えたりすること。また、そのようになること」（『新明解国語辞典』第七版 pp.92）の意味で用いる。

²⁴ 「固定」は「動いたり形を変えたりしないで、一定の位置や状態を保つ（ようにする）こと」（『新明解国語辞典』第七版 pp.530）の意味で用いる。「静止：動きを止めた状態を保ち、前と同じ位置にあること」（同書 pp.811）と同義であると言えよう。

<状態 4> : 微視的・分析的・個別の対象 [-動的] [-静的]

という組み合わせが可能であるはずだが、<状態 4> : [-動的] [-静的] の組み合わせは、運動・移動が確認されず、固定も認められないという意味であり、それはそもそも「状態」そのものが存在しない「無」、つまり「状態」を描写する対象、更には存在の前提である空間そのものが無い²⁵ことになるであろう。<状態 3> : [+動的] [-静的] は描写の対象であるヒト、モノが「運動・移動」を表し、

①「動作²⁶」 : [±移動]

②「位置移動²⁷」 : [+移動]

の範疇として、動態動詞を対象に個別に取り扱われるべきものである²⁸。

<状態 3> 動態動詞 : [+動的] [-静的] [±移動]

1. 2 運動と固定

次に、狭義の状態を規定する<状態 2> : [-動的] [+静的] の意味について考えてみることにする。

[-動的] は運動・移動が無標であることを示す。よって [-動的] は [-動作] [-移動] に等しい。[+静的] は「運動・移動」義を含まない「固定」を意味すると考えられることから、[-移動] という意味素と等義であると言えよう。ゆえに、

<状態 2> : [-動的] = [-動作] [-移動] = [+静的]

と規定することが出来る。

では動作、移動を含まない [-動作] [-移動] とは具体的に何を指すのか、「移動」を相対化することにより考えてみることにする。

2. 移動と変化

空間における [移動] に対して相対化して用いる意味素には、時間軸を基準とする [変化] を設定することが出来る。なぜなら、[変化] は空間における移動を伴わず、時間軸に

²⁵ 認識、観察する主体までも存在しないことを意味する。結果的には<状態 1>とも対立的関係にあることが理解される。

²⁶ 例えば“走”(歩く)、“吃”(食べる)、“跳”(ジャンプする)など。“走”は移動義を伴うが、“吃”、“跳”は起点・経路・着点が無標であるため移動義を伴わない。兰宾汉・邢向东 2006《下册》(pp.24)は動詞の分類として“自主动词”、“非自主动词”挙げるのとは異なる基準で8つのカテゴリーを設ける。1) 动作动词: 吃、跑、听说、读、写、学习、访问、修理 2) 心理动词: 爱、恨、喜欢、担心、渴望、讨厌 3) 表示存在、变化、消失的动词: 存、有、存在、发生、出现、发展、生长、死亡、消失 4) 判断动词: 是、叫、等于 5) 使令动词: 派、叫、请、逼、要求、吩咐 6) 状态动词: 开始、继续、进行、停止、结束 7) 能愿动词: 能、会、敢、要、肯、能够、可以、愿意、应该 8) 趋向动词: 上、下、进、出、来、去、开、起、过、过来、过去、下来、下去、起来

²⁷ ヒト、モノ、コトに生じる物理的運動は空間における位置移動に還元することが出来るため、「運動・移動」を「動作」義、「位置移動」義とする。空間における「位置移動」は上下(垂直)、左右(水平)、中外、集合・離散、接着・分離などを指す。

²⁸ 宇宙空間の存在(空間物質)は宇宙そのものが膨張、あるいは収縮運動を行っているのであれば、すべて動的であるはずだが、人間の意識が捉えうる範囲を超えているため、言語活動としての「状態」に含めるには相応しくないであろう。

おける時間の経過とともに対象を観察する際の基準となるからであり、動詞における「開始・進行・完了」とは観点の異なる軸を有することをその理由として挙げることが出来るからである²⁹。よって、意味素「動作」「移動」「変化」を基に、考えうる状況を整理すると、以下 a、b、c、d のような三つのケースが認められる。

a. [+動作] [+移動] [-変化] : 空間 [起点・経路・着点] [開始・進行・完了]
= <状態 3> : 位置移動動詞

b. [+動作] [-移動] [-変化] : 空間 [開始・進行・完了]³⁰ = <状態 3> : 動作動詞

c. [+動作] [-移動] [+変化] : 時間 [変化前・変化後] = <状態 3> : 瞬間動詞

d. [-動作] [-移動] [+変化] : 時間 [変化前・変化後] = <状態 2> : 形容詞

三つの意味素がどれも無標となる意味素の組み合わせも考えることが出来る。

e. [-動作] [-移動] [-変化]

e は観察される対象が認識の及ぶ時間の範囲において、運動も変化も認められない事象を意味する。モノであれば、移動せず変化もしない静止したままであることに当てはまる。コトには当てはまらないが、話者が実際の現実、事実とは異なっても、ある事象が静止したままであると認識することで成立することが考えられる。

「変化」についても意味素を確定しておかねばならない。「ある何らかの事象について、時間の経過に伴い中心的意味に変更加えること」と考えられる。「中心的意味」とは対象となる事象のゲシュタルト³¹であり、個々の言語集団において共有されるイメージである。

²⁹ 「変化」を、①一瞬で起こる印象、とする場合、②「開始・進行・完了」というプロセスをたどる場合、とに分けて考えることも出来る。②であれば、アスペクト辞と同じ意味範疇に属することになり、分ける意義が見出せなくなる。中国語でアスペクトを表すアスペクト辞（事態助詞、動態助詞とも称される）「了」は先行する動詞によって<完了>、<変化（後）>のいずれかに分かれる。例えば、<完了>：“我们在西安参观了一个博物馆。”<変化（後）>：“我们学校组织了一个旅行团。”<完了>と<変化（後）>の相違点には「+具象性」、「+抽象性」が関わる。例えば「组织」の表す意味は総合的であり、個々の具体的な動作がトータルに組み合わせたり、一つの概念を構成しており、行為、あるいは動作としての有り様を可視化することが出来ないという特徴がある。個別の動作のように「開始、進行、完了」というプロセスを観察することが難しく、アスペクトの概念を適用する意味を持たない。強いて「完了」と関連付けて「组织」のアスペクトを示すとすれば<完了>：<未完了>という二項対立として捉えるのが相応しいであろう。<完了>：<未完了>の対立は<変化（後）>：<変化（前）>と同義である。さらに「组织」に関して言えば、「组织」は「結果」を含意した動詞であり、共起する賓語は当然の事ながら「結果賓語」を条件とする。このような「結果を含意する動詞」には例えば「完成、成功、失敗、実現、消失、产生、发明、发现、开办、关闭」などの語を挙げることが出来る。「結果を含意する動詞」は一方で「到達」を表すことから「持続動詞」に対する「瞬間動詞」としての性質も帯びると考えてよいであろう。

³⁰ 先述した空間の移動を含意しない「吃」（食べる）、「跳」（ジャンプする）のような例を想起されたい。

³¹ 「ゲシュタルト」は「視野にある対象を1つのまとまりのあるものとして知覚する心的作用を体制化（organization）と言い、体制化によって形成されるまとまり（構造体）をゲシュタルトと言う。ゲシュタルトは「形態」を意味するドイツ語の Gestalt に由来するが、個々の要素から体制化によって新たに秩序あるものとして作り出された構造体であって、単なる「集合体（aggregate）や「総和（summation）」とは区別される。」辻幸夫 2013：pp.89 参照。例えば中国語動詞「吃」（食べる）は食べ物

を口に入れ、咀嚼し、飲み込むまでの一連の筋肉運動をトータルに言語化したものであり、何をど

すなわち、

[+変化]: [+時間] [-ゲシュタルト]

[-変化]: [+時間] [+ゲシュタルト]

と規定することが出来る。

[-ゲシュタルト]はゲシュタルトの崩れを意味し、時間の経過に伴ってある事象、事物に何らかの差異が生じ、新たなゲシュタルト性が出現することを言う。このゲシュタルトの崩れが生じず、ある一定の時間においてゲシュタルトが保たれることを「状態」と規定することが出来る。すなわち、「状態」は「変化」と対義的である（[-変化]）であると言えよう。

3. 形容詞における状態と属性

3. 1 状態と属性

『現代中国語辞典』（香坂順一編著：光生館 1982）は品詞分類に「**不完**」: 不完全形容詞・動詞」を設け、形容詞・動詞でありながら完結性（述語となる性質）を持たない類の存在を示している。このような分類は、他の中日辞典には見られない独自の表記である。同書には例えば、「白色/大型/野生/永久」などが挙げられており、これらは現在の文法体系では「区別詞」という独立した品詞として分類が行われ³²、例えば“男・女 / 正・副 / 金・銀 / 単・双 / 大型・小型・微型 / 彩色 / 新式・老式・旧式 / 急性・慢性 / 上等・下等 / 高等・低等”などの語がある。これらの語に共通して見られる特徴は、名詞を修飾、限定する機能に特化して、主にモノが本来的に有する形状、形質を表し、述語とはならないことが指摘される³³。これらの語は一時的な変化を伴う性質のものではなく、モノそのものに具わっている変化しない（と認定された）特性であり、「属性」という意味要素を示すと考えてよいであろう。文法的意味としての性質から判断されるように、『現代汉语词典』（第七版）2016ではこれらの語を大分類では「形容詞」とするものの、下位分類の一つ“属性詞”のカテゴリーとして扱うことの正当性は明らかである。よって「属性」は個別のヒト、モノを扱う<状態 2>と異なる文法的意味を含むため、意味素には[-変化] [-述語性] [+特性]を加え記述するのが相応しいであろう。程度副詞の修飾を受けない[-程度]という点も

う食べるかによって筋肉運動に微細な違いはあるものの、また個人によっては肉体的特徴による食べ方、咀嚼の仕方に特徴が見られるとしても、ある一つの動的イメージとしてまとまりを見せる。「ルビンの盃」は「地」と「図」の転換によって認知の結果が異なる図として例に挙げられるが、「ルビンの盃」が一つのゲシュタルトであると同時に、「顔」と「盃」もそれぞれにゲシュタルトとして成立するため、「地」と「図」の転換が起こることによる認知現象であると考えられる。異文化間においてゲシュタルトが共有されなければ翻訳、通訳は成立しにくいことが理解されよう。

³² 齊沪扬主编《现代汉语》商务印书馆(2007pp.300-302)参照。杨文全主编《现代汉语》重庆大学出版社(2010pp.275-276)のように形容詞の下位区分として説明する立場もある。

³³ 主題に対する陳述として「属性」を述べるには“是…的”構文を用いることが指摘されよう。単独で述語を構成することが出来ないという事は、ある何かが存在することを前提に、その何かがどのようなモノであるかを説明する際の内容を表すのである。

加味する必要がある。³⁴

<状態 2> 属性：[-動作] [-移動] [-変化] [-述語性] [-程度] [+特性]

形容詞本来の意味は「性質」であるとする「属性」に対比させることで以下のように定義付け出来るであろう。

<状態 2> 性質：[-動作] [-移動] [+変化] [+述語性] [+程度] [-特性]

朱德熙 1982 は形容詞を性質形容詞と状態形容詞とに分ける。本稿と関わりのある状態形容詞を 5 種類に分けている。

1. 単音節形容詞からなる AA 式重畳型
2. 二音節形容詞からなる AABB 式重畳型
3. 二音節形容詞からなる ABAB 型重畳型
4. 接尾語を持つ形容詞
 - ① ABB 型
 - ② A 里 BC
 - ③ A 不 BC

5. 単音節、二音節形容詞からなる「程度副詞+形容詞+“的”」形式³⁵

語彙項目として立項される 4 以外は形容詞句と称すべきであるが、これと更に属性表す形容詞を除いたものが性質形容詞ということになるであろう。

3. 2 客観性と個性

対象を描写しようとする際の話者（書き手）の態度には主観性、客観性のいずれか、あるいは複合した記号が反映される。性質形容詞であれば程度性であり、状態形容詞であれば語彙項目の選択がなされる。例えば、単音節形容詞について ABB 型は比喻性が高く、どの項目を選択するかは、個別の状況に応じて、話者の判断に委ねられる。《現代汉语词典（第七版）》：pp.532-534 には“黒”の ABB 型を 12 項目挙げる³⁶。例えば、

黒沉沉 黒洞洞 黒乎乎 黒茫茫 黒蒙蒙 黒漆漆 黒黢黢 黒黓黓 黒压压
黒幽幽 黒油油 黒黝黝

4. 状態と常態、様態

欧阳晓芳 2020 (pp.62) は、副詞“正”と共起しない時間副詞について検討した結果、次の 4 類の副詞の範疇であることを明らかにしている。

(1) 表示延续、重复或频度、如“一直”“不再”“每天”“常常”

(持续、重複あるいは頻度を表す；“一直（ずっと）”“不再（もはや～ない）”“每天

³⁴ 「属性」については張黎 2020 参照。

³⁵ 松村文芳 1998 参照。

³⁶ “白”の ABB 型が 3 語であるのとは対照的である。例えば、“白皑皑、白花花、白朦朦”。pp.23-25 参照。

(毎日)“常常(しばしば)”:筆者訳)

(2) 表示已然、经历或未然, 如“已经”“曾经”“尚未”

(已然、経歴、あるいは未然を表す; “已经(すでに)”“曾经(かつて)”“尚未(まだ~ない)”: 筆者訳)

(3) 表示在时间参照点前后的近距离, 如“刚刚(刚)”“就”

(時間の参照点前後から近い間隔を表す; “刚刚(刚)(~したばかり)”“就(~するとすぐに)”: 筆者訳)

(4) 表示在时间参照点前后的远距离, 如“早”“才”(他早走了, 你怎么才来?)

(時間の参照点前後から遠い間隔を表す; “早(とっくに)”“才(やっと)”(他早走了, 你怎么才来? 彼はとっくにやってしまったよ、君は今頃になってようやく来るなんて): 筆者訳)

(1)に述べる副詞は時間的継続、動作・行為の重複、反復を示すものであり、“天天”“时时刻刻”“每时每刻”“仍(然)”“依然”“永远”“还”“老(是)”“总(是)”“又”などの副詞も含まれることを指摘する。副詞によって示される、恒常的なある何らかの事態は「常態」と規定し、<動詞+着>が示す文法的意味である「状態」と区別する。

「常態」と「状態」、「進行」の概念は親和性が高く、共起すしやすい傾向にある。例えば、

(11) 我一直爱着你/从此不再等着你。³⁷(わたしは今でもずっとあなたのことを愛している。/もうこれからはあなたのことを待たたりしない: 筆者訳)

(12) 我一直/始终/还在等你。³⁸(わたしはずっと/いつでも/まだあなたのことを待ち続けている: 筆者訳)

<動詞+着>は連用修飾語(状況語)を伴うことがある。例えば、

(13) 我恍然觉得白狗和她之间有一条看不见的线, 白狗紧一步慢一步地颠着, 这条线也松紧紧牵牵地牵牵着。(突然、私には白犬と女とが一本の目に見えぬ綱でつながれており、犬が早く遅く歩くにつけ、この綱もピンと張ったり弛んだりするように思われた。)(莫言《白狗秋千架》、藤井省三訳)³⁹

(14) 他靠在铺盖卷上, 也不看父母亲, 眼睛茫然地望着对面墙, 开口说: “我的书都不成了……”(布団にもたれ掛かると両親を見もせず、目はぼんやりと壁に向けたまま口を開いた。「もう教えられなくなったんだ……」)(路遥《人生》、安本実訳)

例(13)は“紧一步慢一步”が状況語となって“颠着”を修飾し、(14)では“茫然”が状況語として“望着”を修飾する。情報構造の原則からは(2)旧情報から新情報、(3)の原則を適用すれば状況語は「因」(遠景)であり、被修飾語の動詞は「地」(焦点)であると解

³⁷ 欧阳晓芳 2020 (pp.62)。

³⁸ 欧阳晓芳 2020 (pp.62)。

³⁹ 吉田富夫訳『白い犬とブランコ』(2003:pp.81):「白犬と女の間には目に見えない糸があるようにぼくは漠然と感じた——犬が速度を変えるたびに、その糸がたわんだり張ったりする。」参照。

積することが出来よう。描かれる「図」は、「地」(焦点)に対して背景となる全体的な有り様であり、「様態」と称することも可能ではないかと考える。

5. おわりに

言語研究における「状態」は自明の概念として生得的に与えられており、中国語の学習、習得過程でも改めて語義を確認するでもなく基礎語彙として使われている。しかし、一旦立ち止まって理性的に意味を記述しようとする、あまりに漠然として基本義を明らかにし難いことに気付かされる。

現実の世界をどう見るかという問題は、どう表現するかという話者の主体性、視点の問題でもある。語の選択、文法手段の制約により、同じく見えている世界も描かれ方によって、異なる側面に焦点が当てられることになる。

欧阳晓芳 2020 が指摘するように、動態助詞(アスペクト辞)“着 zhe”は「状態化」の標識である。一方、形容詞が表す「状態」の意味が定義付けされておらず、「性質」、「属性」とどう区別するかは厳密な分析を行わねばならない。

<状態 2>には形容詞以外に動作性、移動性を有さない心理動詞⁴⁰も含まれる。

<状態 2>心理動詞：[-動作] [-移動] [+変化] [+程度]

<状態 2>性質形容詞に [+使役] を意味素として加えることで形容詞は他動詞化 ([+動的]) し、 [+変化] を表すことが知られている。例えば、

(15) 把菜汤热一下。⁴¹ (料理とスープを温める：筆者訳)

(16) 通过实践, 丰富工作经验。⁴² (実践を通じて業務上の経験を豊かなものにする：筆者訳)

(17) 发展生产, 富裕人民。⁴³ (生産を發展させ人々の暮らしを豊かにする：筆者訳)

(18) 扩大商业网, 便利群众。⁴⁴ (商品供給網を拡大し、住民の利便性を向上させる：筆者訳)

(19) 我们准备组织文娱活动, 来热闹一下。⁴⁵ (私たちが何か楽しいことを企画して、みんなを楽しませよう：筆者訳)

これまでの<状態 1~4>についての分析をまとめてみることにする。

⁴⁰ 中国語の心理動詞には、例えば“想、要、打算、准备、以为、认为、喜欢、希望、兴奋、扫兴、害怕、恨、羡慕、向往”など多数があり、一部“想、要”など助動詞として用いられるものもある。

⁴¹ 《现代汉语词典(第7版)》pp.1093。

⁴² 《现代汉语词典(第7版)》pp.387。

⁴³ 《现代汉语词典(第7版)》pp.413。

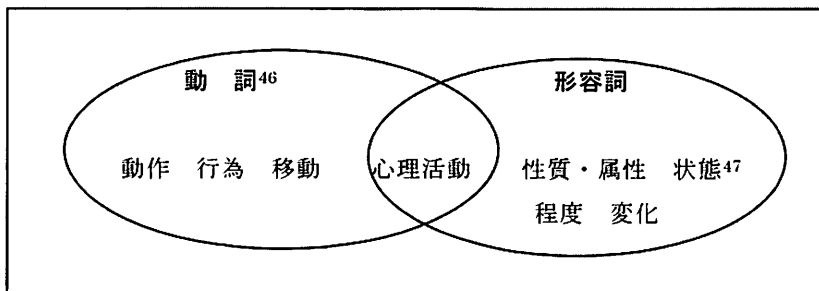
⁴⁴ 《现代汉语词典(第7版)》pp.82。

⁴⁵ 《现代汉语词典(第7版)》pp.1094。

表 6

<p><状態 1> : 巨視的・総合的・複数の対象 [+動的] [+静的]</p> <p><状態 2> : 微視的・分析的・個別の対象 [-動的] [+静的]</p> <p style="padding-left: 2em;">([-動的] = [-動作] [-移動] = [+静的])</p> <p style="padding-left: 2em;">形容詞 [-動作] [-移動] [+変化] : 時間 [変化前・変化後]</p> <p style="padding-left: 2em;">(性質 : [-動作] [-移動] [+変化] [+述語性] [+程度] [-特性])</p> <p style="padding-left: 2em;">(属性 : [-動作] [-移動] [-変化] [-述語性] [-程度] [+特性])</p> <p style="padding-left: 2em;">心理動詞 : [-動作] [-移動] [+変化] [+程度]</p> <p><状態 2> : [-動的] [+静的] [+使役] → [+動的] [+変化]</p> <p><状態 3> : 微視的・分析的・個別の対象 [+動的] [-静的]</p> <p style="padding-left: 2em;"><動詞+着></p> <p style="padding-left: 2em;">動態動詞 : [+動的] [-静的] [±移動]</p> <p style="padding-left: 2em;">位置移動動詞 : [+動作] [+移動] [-変化]</p> <p style="padding-left: 4em;">: 空間 [起点・経路・着点] [開始・進行・完了]</p> <p style="padding-left: 2em;">動作動詞 [+動作] [-移動] [-変化] : 空間 [開始・進行・完了]</p> <p style="padding-left: 2em;">瞬間動詞 [+動作] [-移動] [+変化] : 時間 [変化前・変化後]</p> <p><状態 4> : 微視的・分析的・個別の対象 [-動的] [-静的]</p>
--

図 1 動詞と形容詞の関係



「変化」を観察し言語化するためには当然の事ながら、描写の対象の存在を前提とする。中国語において形容詞が表す意味に変化の生じたことを示すのは文末の助詞「了」⁴⁸であ

⁴⁶ 動詞をどう分類するかについては、基づく観点により多くのバリエーションが存在する。本稿では広く動態動詞を指すものとする。

⁴⁷ 朱徳熙 1982 に基づく状態形容詞によって示される「状態」。

⁴⁸ 文言の助辞“矣”に相当する。文末の“了”は「変化」のマーカーであると言える。この“了”は視点を変えることで「変化」の「結果」として「新たな事態の出現を表す」と説明することが可能であり、どう言語化するかの問題である。文末の“了”が無標の場合、「状態」を言外に意味することになろう。「状態」の有標は“呢”であり、副詞“还”との共起が考えられる。

る。客観的事実としての変化(1)と、話者の観察の結果に基づく認識の変化(2)とに分けて理解するのが合理的である。話者の観察の結果は客観的であるように見えるが、主観的な判断が含まれる場合もあるため、文の形式に現れることが無くとも、話者とその視点を加味して解釈する必要が生じる。

発話 = [話者] [話者の判断を示す動詞] + 文 + “了”

(1) [-話者] [-話者の判断を示す動詞] + 文 (状態) + “了”

(20) 天 黑 了。(日が暮れてあたりが暗くなった。)

(2) [+話者] [+話者の判断を示す動詞] + 文 (状態) + “了”

(21) 我 看 天 黑 了。(日が暮れてあたりが暗くなった[と私は考えている]。)

例(20)は「亮」にゲシュタルト(Gと略称)の崩れが発生し、「亮」Gxから中間の「黒下来」Gyへの移行を経て、最終的に近接する意味領域、あるいは対義的な「黒」Gzとなる一連のプロセスを「変化」として捉えての発話であると考えられる。例(21)はGの崩れを前提として、新たなGの出現に焦点を当ててのものである。

すでに述べたように、「状態」を「変化」と相対的、対義的に捉えることで、「状態」の意味が明確になる。時間の経過に関わらずGxが保持されることを意味するメタファーとすれば、現実の空間におけるプロトタイプは「固定」が想定されるのではなかろうか。先に示した表4を次のように修正することにしたい。

表4(2)

	プロトタイプ	メタファー
	空間	時間
	固定	状態
	移動 取り外し—移し替え—取付 (離脱—移行—装着)	変化 Gx—Gy—Gz

井上優・黄麗華 2000: pp.116 は「動作」と「変化」について、次のように規定している。

まず、「動作」と「変化」が次元の異なる事象であることを述べる。

事象のタイプとして、よく「状態」「動作」「変化」ということが言われる。このうち、「状態」は、時間の流れにそった展開のない静的な事象であり、「動作」と「変化」は、時間の流れにそった展開のある動的な事象である。

「時間の流れにそった展開のない静的な事象」とは、話者の観察の結果Gxが保持されたままGy、Gzへの移行を生じないことを述べたものである。「動作」と「変化」は、時

間の流れにそった展開のある動的な事象」は「動的」あるいは「静的」な事象について「展開のある」、つまり $G_x - G_y - G_z$ と捉えようとする記述になっている。「動的」について言えば、「動詞＋“着”」形式は G_x （例えば“走着”）が保持されると「認識」することで、また「時間の流れにそった」という観点から「状態の持続」と表現されるのである。

三省堂刊『新明解国語辞典』所載「状態」についても再解釈を行ってみることにしたい（表 8 参照）。例えば、

われわれが見たり聞いたりさわったり感じたりすることが出来る物事を、ある時点を中心として切り取ってとらえた時の、形や性質がどのようなものであるかということ

「ある時点を中心として切り取ってとらえた時の」とは「認知の及ぶある一定の時間を範囲として」の意であり、「形や性質がどのようなであるか」は観察の対象とする事象、事物の G_x を指すものと考えられる。同書「変化」についての記述も井上優・黄麗華 2000：pp.116 と一致するものと考えてよい。

「状態」、「動作」、「進行」については截然と分かれるものではなく、一定の境界領域（グレーゾーン）が認められるのである。例えば、

- (22) 灯还很亮。（ランプの明かりがまだ明るい：静的状態）
- (23) 灯还亮着。（明かりがまだ灯っている：動的状态）
- (24) 外面下雨呢。（外は雨が降っている：動的状态）
- (25) 外面下着雨呢。（外は雨が降っている：動的状态）
- (26) 外面还在下雨。（外は雨が降り続けている：進行）
- (27) 他在看书呢。（彼は本を読んでいる、読んでいるところだ：進行）
- (28) 他看着书呢。（彼は本を読んでいる：動的状态）

グレーゾーンが存在するのは、例えば「雨が降る」という現実を、話者がどう認識し言語化するか、その選択肢として無標と有標、「状態」と「進行」が用意されているからであると言えよう。

時間軸を中心とする「状態」が空間に対するメタファーであることを述べ、プロトタイプには「固定」を措定した。空間における「固定」は狭義の「存在」にほかならず、[動詞＋“着”]が「状態化」の標識であれば、[動詞＋“了”]との相補分布という関係から、両者を以下のように位置付ける提案を行い、今後の課題としたい。

表7 動態助詞“了”と“着”の相補分布

	出現	存在	消失
了	○	—	○
着	—	○	—

表8 『新明解国語辞典』「状態、有様、様子、変化、属性」などの釈義

書名	出版社 発行年	項目	記述	頁
新明解国語辞典 第七版 ⁴⁹	三省堂 2012	状態	われわれが見たり聞いたりさわったり感じたりすることが出来る物事を、ある時点を中心として切り取ってとらえた時の、形や性質がどのようなかということ	pp.722
		有様	動かしがたい事実としてとらえられた、物事の状態	pp.46
		様子	なんらかの判断や感情をもたらす（その人の判断や感情を通してとらえられた）物事の状態	pp.1554
		変化	時間的・空間的な推移によって物事の性質や状態などに違いが現れること。	pp.1371
		推移	時のたつにつれ、そのものの状態が変わること	pp.771
		性質	②その物を多角的にとらえて認められる、特有の性能・性状	pp.811
		属性	（ほかの物には無く）その物に（の同類に共通して）備わっている性質	pp.871
		様態	物の存在や人の行動のありさま。	pp.1556

引用文献

莫言小説精短系列《初恋・神嫖》所収《白狗秋千架》pp.87-108、上海文艺出版社 2000
第1版

⁴⁹ 三省堂『新明解国語辞典』の編者には山田忠雄、柴田武、酒井窓二、倉持保男、山田明雄、上野善道、井島正博、笹原宏之氏が名前を連ねており、とりわけ言語学者である柴田武、上野善道両氏が厳密で明確な語義の記述に大きく関わっているように思われる。

藤井省三・長堀祐造訳『発見と冒険の中国文学② 中国の農村から 莫言短編集』、藤井省三訳「白い犬とブランコ」pp.51-82、JICC 出版局 1991 年刊
吉田富夫訳『白い犬とブランコ～莫言自選短編集』、白い犬とブランコ pp.78-107、NHK 出版 2003 年 第 1 刷
《路遥中篇名作选》陈泽顺选编所收《人生》pp.4、陕西人民出版社 1993 第 1 版
安本実訳『路遥作品集』、「人生」pp.166、中国書店 2009 年刊

参考文献

- 井上優・黄麗華 2000 「否定から見た日本語と中国語のアスペクト」、『現代中国語研究』、京都：朋友書店 Vo.1(pp.113-122)。
- 小野秀樹 2004 「名詞句における形容詞の属性付与と様態描写」、『現代中国語研究』、京都：朋友書店 Vo.10(pp.49-62)。
- 沈家煊著、大島吉郎訳 2012 「了 2」の行、知、言三域」、大東文化大学大学院『外国語学研究』Vo.13(pp.267-277)。
- 辻幸夫編 2013 『新編認知言語学キーワード事典』、東京：研究社
- 中川正之 1996 『はじめての人の中国語：海岸通りナジュサロントビル 3 階 2 号室』、東京：くろしお出版。
- 中島平三・外池慈生 1994 『言語学への招待』、東京：大修館書店。
- 松村文芳 1998 「形容詞の意味上の役割」、月刊『中国語』、東京：大修館書店(pp.58-60)。
- 竟 成 2004 汉语时间原理论纲、《汉语时体系统国际研讨会论文集》、上海：百家出版社 (pp.1-12)。
- 兰宾汉・邢向东 2006 《现代汉语》、北京：中华书局。
- 李向农 1997 《现代汉语时点时段研究》、武汉：华中师范大学出版社。
- 刘正琰・高名凯・麦永乾・史有为 1984 《汉语外来词词典》、上海：上海辞书出版社。
- 吕叔湘 1999 《现代汉语八百词(增订本)》、北京：商务印书馆。
- 欧阳晓芳 2020 “正”“在”“着”的功能再分析、《语言研究》第 3 期(pp.59-68)。
- 齐沪扬主编 2007 《现代汉语》、北京：商务印书馆。
- 杨文全主编 2010 《现代汉语》、重庆：重庆大学出版社。
- 袁毓林 1993 《现代汉语祈使句研究》、北京：北京大学出版社。
- 张国宪 2006 性质形容词重论、《世界汉语教学》第 1 期(pp.5-17)。
- 张 黎 2020 汉语“属性”表达说略、『現代中国語研究』、東京：朝日出版 Vo.22(pp.49-62)。
- 朱德熙 1956 现代汉语形容词研究、《现代汉语语法研究》1980 北京：商务印书馆(pp.3-41)。
- 1982 《语法讲义》北京：商务印书馆。